

国際文化学域

教 学 の 手 引 き
2022 年度入学生用

英米文学専攻
ヨーロッパ・イスラーム史専攻
文化芸術専攻

文学部

国際文化学域

英米文学専攻

ヨーロッパ・イスラーム史専攻

文化芸術専攻

Table of Contents

I	国際文化学域	
1	教育内容と特色	3
2	履修の仕方、学域から専攻への流れ	3
3	1 回生の専門科目	4
4	研究入門の学び方	4
5	リテラシー入門の学び方	5
II	英米文学専攻	
1	教育内容と特色	9
2	専門科目一覧	10
3	履修方法	11
4	専門演習 I～IV	11
5	卒業論文	12
6	その他	12
III	ヨーロッパ・イスラーム史専攻	
1	教育内容と特色	19
2	専門科目一覧	20
3	履修方法	21
4	専門演習 I～IV	21
5	卒業論文	21
6	その他	22
IV	文化芸術専攻	
1	教育内容と特色	27
2	専門科目一覧	28
3	履修方法	29
4	専門演習 I～IV	30
5	卒業論文	30
6	その他	31

「教学の手引き」の使い方

- ・本書は、「学修要覧」や「履修・登録の手引き」と合わせて、学びの指針として役立ててください。
- ・本書は、卒業まで使用します。再配付しませんので大切に扱ってください。
- ・本書の記載内容に追加・変更があれば、manaba+R で随時発表します。定期的に確認をおこなってください。



国際文化学域

1 教育内容と特色

グローバル化の進む現代においては、世界各地の多種多様な民族や文化が相互に接触・交流しながら影響しあい、一つの運命共同体となりつつあります。このように世界が大きく変化していく中で、人々が他者を尊重しつつ、いかに共生できるかが、現代の人間にとって差し迫った問題となっています。それゆえ、世界の成り立ちを過去から歴史的に理解し、それを踏まえて多種多様な文化と向き合う態度を培うことは、きわめて重要な課題となります。

国際文化学域が展開する教学の最大の特徴は、芸術・文学・歴史・思想などの、人間文化・社会の諸領域に関連する諸学問を横断し、さまざまな時代と地域を視野に入れつつ、多様な価値観のもとに世界を深く理解することを目指す点にあります。そのためには、現代の人文諸科学の方法や成果を学び、自らの感性、歴史的・論理的思考力、表現力を高めると共に、英語を軸として、諸外国語の高度な運用能力を習得する必要があります。本学域では、以上のような専門的かつ先端的な人文学諸領域の学習・研究を通じて、国際的な視野と展望を持った人材を育成します。

2 履修の仕方、学域から専攻への流れ

国際文化学域は、「英米文学専攻」、「ヨーロッパ・イスラーム史専攻」、「文化芸術専攻」から構成されます。各専攻への分属は、1回生4月のオリエンテーション時及び9月下旬から10月上旬に実施される専攻希望調査を経て、12月上旬に実施される本申請によって行われます。

専攻が決定する前の1回生次における履修の中心を成す科目は、「リテラシー入門」、「研究入門Ⅰ・Ⅱ」、「国際文化入門講義」です。「リテラシー入門」では、学術的な文章を書く技術、各種インフォメーションを扱う技術など、大学の学びに必要な不可欠となる基礎的な知識と技能を身につけると共に、卒業後の進路を見据えつつ、これから始まる4年間の大学生活を設計し、充実した大学生活を送るための自律性を養います。「研究入門Ⅰ・Ⅱ」では、人文学系の学問には必須となる文献資料や図像を読み解く技術を学び、自ら立てた問いに関するリサーチを行い、その研究成果をプレゼンテーションとして発信する能力を実践的に養います。1回生春学期に開講される「国際文化入門講義」では、国際文化学域を構成する3専攻によるリレー講義を通して、各専攻の専門的な学びに触れます。

初年次教育という目的のもとにゆるやかにかつ有機的に連携する「リテラシー入門」、「研究入門Ⅰ・Ⅱ」、「国際文化入門講義」では、大学での4年間の学びの基礎を築き、国際文化学域の学問に関する初歩的な知見を獲得します。それらの科目は、最終的には、各自が自らの学問的関心のありかを見極め、進むべき専攻を主体的に決める上での貴重な啓発の場を与えてくれることでしょう。

分属については、4月のオリエンテーションや「研究入門Ⅱ」の授業で詳細を説明するので、必ず出席し、所定の手続きをするようにして下さい。

3 1 回生の専門科目

各科目の科目概要は manaba+R に掲載しています (manaba+R ログイン>文学部生のページ>文学部の履修>教育学の手引き)。学修を進めるに当たって参考にしてください。また、2 回生以降に所属する各専攻の必修科目・履修指定科目については、各自が所属する専攻の履修方法をご覧ください。

科目区分	科目名	配当回生	単位数	履修条件
入門科目 (初年次科目)	国際文化入門講義	1 回生のみ	2	履修指定
	イスラーム学入門	1 回生のみ	2	
小集団科目	研究入門Ⅰ	1 回生のみ	2	履修指定
	研究入門Ⅱ	1 回生のみ	2	履修指定
英米文学専攻 自専攻科目	英米文学概論Ⅰ	1 回生以上	2	履修指定※
	英書講読 (Intermediate)	1 回生のみ	2	
ヨーロッパ・イスラーム史専攻 自専攻科目	ヨーロッパ史概論Ⅰ	1 回生以上	2	履修指定※
	イスラーム史概論Ⅰ	1 回生以上	2	履修指定※
	ヨーロッパ・イスラーム史 基礎文献講読	1 回生以上	2	
文化芸術専攻 自専攻科目	外国語文献リーディングⅠ	1 回生以上	2	2 回生以上配当の「英書 リーディングⅠ」「英書リー ディングⅡ」を含め 2 科目 4 単位以上履修指定※
	外国語文献リーディングⅡ	1 回生以上	2	
	文化芸術概論	1 回生以上	2	
	キリスト教文化史	1 回生以上	2	

※専攻分属の結果配属された専攻において履修指定となる科目です。いずれも学域の教学に深い関連を持つ科目なので、希望する専攻の科目か否かにかかわらず積極的に履修してください。

4 研究入門の学び方

大学の学びでは、自ら学問的な問いを立て、綿密な分析と調査を行い、その研究成果を論文あるいはプレゼンテーションとして発表することが要求されます。「研究入門Ⅰ・Ⅱ」は、こうした主体的な学びを確立するために必要な技術を実践的に学ぶ小集団科目です。授業は、個人、あるいはグループによる発表・ディスカッションを主として進められ、「リテラシー入門」と連動しつつ、「考え、調べ、表現する」技術を習得します。テーマを設定する着想力、資料を調査し分析するリサーチ力、対象となる事象や問題を批判的・歴史的に捉える人文学的な思考力、そして自らの考えを論理的に述べる発信力—こうした技術を実践的に学ぶ「研究入門」は、1 回生の学びの中軸となる科目であり、4 年間の学びの礎となるでしょう。

5 リテラシー入門の学び方

「リテラシー入門」は文学部の1回生対象の科目で、全員が受講する履修指定科目です。授業は「日本語リテラシー」・「情報リテラシー」・「キャリアリテラシー」・「スチューデントリテラシー」の4要素から成り立っています。リテラシーとはもともと文字を読み書きする能力のことでしたが、今では様々な情報を理解して、自分と周りの人々（社会）とのコミュニケーションに役立てる能力を幅広く指す言葉として使われるようになったものです。

「日本語リテラシー」はライティングスキルを涵養するためのもので、大学生としての日本語ライティング（作文）能力を身につけます。批判的視点を養う、自分の視点を客観的な証拠に基づいて立証する、論理的に文章を構成するスキルを学んだ上で、アカデミックな文章（論文）を書く力を養うことを目指します。

「情報リテラシー」はインフォメーションスキルを身につけるためのもので、立命館大学で必要不可欠なメールシステム、学習支援システム manaba+R、CAMPUS WEB などの情報環境を理解し、文学部生としてふさわしい口頭報告やレポート・論文を仕上げるための Microsoft Word、Excel、PowerPoint などの使用方法を学びます。これらのスキルを修得することで情報化社会で活躍するための基礎を得るとともに、インターネットを使用する時のマナー・倫理を身につけます。

「キャリアリテラシー」はキャリアスキルを早期に修得するためのもので、卒業後の自分の人生をイメージしながら、これからの4年間の大学生活を設計し、充実した学修や課外活動に取り組む能力を身につけます。単なる就職活動のコツを学ぶ授業ではありません。

「スチューデントリテラシー」はスチューデントスキルを身につけるためのもので、大学生として充実した学修・生活ができる能力を獲得します。具体的な授業の内容は、創作物（レポート・論文）作成にあたっての倫理的な注意事項、健康な生活を送るための諸注意などです。

最後に「リテラシー入門」の到達目標は、以下の通りです。

- (1) 自分の考えを論理的な文章として表現できる。
- (2) コンピューターを大学での学修のツールとして使うことができる。
- (3) 自分のキャリアを設計するという目的意識を持って学修と課外活動を行うことができる。
- (4) 大学生として必要な学修上・生活上の倫理を身に付け、充実した学修・生活ができる。



英米文学専攻

1 教育内容と特色

英米文学専攻では、中世から21世紀の今日に至る、イギリスやアメリカに限定されない英語圏の詩・演劇・小説・散文作品を広く扱います。広範な英語文学作品の研究を通して、英語という言語の奥深さに触れ、その表現の可能性、作品世界を構築する文化的・歴史的・政治的背景、文学テキストの特性について理解を深めます。また、言語に対する感性を磨き、多様な視点や価値観を涵養するとともに、様々な時代や地域の違いを超えた人間の普遍性にも触れることを学びの基本理念としています。それは、英語リテラシーを基盤としつつ、多彩な知識を自在に関連させ、自ら問題を見出して考察し、見解を言語化する総合的な人文学的叡智を獲得することを意味します。

「グローバル言語」としての英語の位置づけが決定的な今日、英語に対する需要はますます高まっています。しかし、外部からの要請に促されるまま性急に外国語スキルを習得しようとする姿勢は、英語優位を無批判に受け入れ、自らの主体性を放棄する状況を生み出しかねません。英米文学専攻では段階的にじっくりと文学テキストと向き合います。「基礎講読」「英書講読」といった講読科目や多様なテーマを扱う「英米文学特殊講義」では、個々の作品世界の特性や文化的背景について具体的に学びます。また、「英作文法」「英文演習」「英会話」「翻訳演習」「文芸翻訳演習」といった科目では、英語を「読む・書く・聞く・話す」運用能力を総合的に伸ばします。そして、「英米文学概論」「英文学史」「米文学史」の講義科目では、英語文学の豊かな伝統とその多様な側面に関する理解を深めます。このようなカリキュラムで培った広い視野と多面的な関心をもとに、「専門演習」では、他者の考えを正しく理解した上で、緻密な分析と深い学識に基づいて自らの考えを言語化する、高度な言語表現能力と論理的思考力の育成を目指します。

あまたの可能な読みの中から自らの読みを構築し、今度はそれを自らの言葉で肉付けしていく——文学研究の創造的な営為を通じて身につける高度なリテラシーは、人文学研究や英語教育分野のみならず、国際社会の様々な分野において、主体的に世界と向き合い、自らのキャリアを形成する支えとなることでしょう。

2 専門科目一覧

各科目の「科目概要」は manaba+R に掲載しています (manaba+R ログイン>文学部生のページ>文学部の履修>教学の手引き)。学修を進めるに当たって、参考にしてください。

教育目標

- (1) 人間や世界の様々な文化について幅広い知識を身につけ、人文学の方法論を用いて理解をすることができる (知識・理解)
- (2) 現代・過去の社会や文化に対して多面的な関心を持ち、自らの見解を形成できる (思考・判断)
- (3) 個人や文化の多様性を認め、社会の一員として行動できる (思考・判断)
- (4) 人間や文化について関心を持ち、自らの力で課題を設定し探求する意欲を持つ (関心・意欲)
- (5) 現代社会が抱える問題に対し、大学で学んだことをもとに主体的に解決しようとする態度を持つ (態度)
- (6) 自分の調査・研究の結果や、それらをふまえた自己の見解を、口頭あるいは文章や制作物の形で表現することができる (技能・表現)

科目区分			科目名	配当回生	重複受講 可能	コア 科目	専攻学生 のみ 受講可	単 位 数	教育目標						履修方法
									①	②	③	④	⑤	⑥	
専門科目	学域	入門科目 (初年次科目)	国際文化入門講義	1 回生のみ		○	○	2	◎	○	○	○			履修指定
			イスラーム学入門	1 回生のみ				2	◎	○		○			
	小集団科目	研究入門Ⅰ	1 回生のみ		○	○	2	○	◎		○		○	履修指定	
		研究入門Ⅱ	1 回生のみ		○	○	2	○	◎		○		○	履修指定	
		基礎講読Ⅰ	2 回生のみ		○	○	2		○	○	◎	○		履修指定	
		基礎講読Ⅱ	2 回生のみ		○	○	2		○	○	◎	○		履修指定	
		専門演習Ⅰ	3 回生のみ	○	○	2		○	○	○	◎		履修指定		
		専門演習Ⅱ	3 回生のみ	○	○	2		○	○	○	◎		履修指定		
		専門演習Ⅲ	4 回生以上	○ (注1)	○	2			○	○	○	◎	4 単位必修 (注2)		
		専門演習Ⅳ	4 回生以上	○ (注1)	○	2			○	○	○	◎			
	卒業論文		卒業論文	4 回生以上		○	4	○	○	○	○	○	◎	必修	
	自専攻科目	概論	英米文学概論Ⅰ	1 回生以上		○	2	◎	○	○				履修指定	
			英米文学概論Ⅱ	2 回生以上		○	2	◎	○	○				履修指定	
		講義	英文学史Ⅰ	2 回生以上		○	2	○	◎	○				履修指定	
			英文学史Ⅱ	2 回生以上		○	2	○	◎	○				履修指定	
			米文学史Ⅰ	2 回生以上		○	2	○	◎	○				履修指定	
			米文学史Ⅱ	2 回生以上		○	2	○	◎	○				履修指定	
			英書講読 (Intermediate)	1 回生のみ			○ 学域学生	2	○	◎	○				
		英書講読 (Advanced)	2 回生以上	○		○	2		○	◎	○			4 単位以上必修	
		演習	英作文法	2 回生以上			○ (注3)	2		○	◎	○	○		必修
			英文演習	2 回生以上			○ (注3)	2		○	◎	○	○		必修
			英会話Ⅰ	2 回生以上			○ (注3)	2		○	◎	○	○		
			英会話Ⅱ	2 回生以上			○ (注3)	2		○	◎	○	○		
			英語論文演習	3 回生以上	○		○	2		○	○	◎	○		
			翻訳演習	3 回生以上			○	2	○		○	◎	○		
			文芸翻訳演習	3 回生以上			○	2	○		○	◎	○		
		特殊講義	英米文学特殊講義	2 回生以上	○			2	○	◎			○		

1 回生配当の「国際文化入門講義」・「研究入門Ⅰ・Ⅱ」は、学域に所属する学生のみ受講可能とします。

注1) 重複受講が可能となるのは、年度を越えて同一セメスターで履修する場合に限ります。

注2) 専門演習Ⅲ・Ⅳについては合計で4単位までしか履修できません。

注3) 英語圏文化専攻および国際英語専攻を除く各専攻の英語免許取得希望者については、英米文学専攻以外でも履修を許可します。

3 履修方法

【必修科目】卒業するために必ず単位を修得しなければならない科目

科目区分	科目名	単位数	配当回生	履修条件
講読	英書講読 (Advanced)	2	2 回生以上	4 単位以上必修
演習	英作文法	2	2 回生以上	2 単位必修
	英文演習	2	2 回生以上	2 単位必修
小集団科目	専門演習Ⅲ	2	4 回生以上	4 単位必修
	専門演習Ⅳ	2	4 回生以上	
卒業論文	卒業論文	4	4 回生以上	4 単位必修

【履修指定科目】必ず登録・受講しなければならない科目

科目区分	科目名	単位数	配当回生	履修条件
入門科目 (初年次科目)	国際文化入門講義	2	1 回生のみ	2 単位
小集団科目	研究入門Ⅰ	2	1 回生のみ	2 単位
	研究入門Ⅱ	2	1 回生のみ	2 単位
	基礎講読Ⅰ	2	2 回生のみ	2 単位
	基礎講読Ⅱ	2	2 回生のみ	2 単位
	専門演習Ⅰ	2	3 回生のみ	2 単位
	専門演習Ⅱ	2	3 回生のみ	2 単位
概論	英米文学概論Ⅰ	2	1 回生以上	2 単位
	英米文学概論Ⅱ	2	2 回生以上	2 単位
講義	英文学史Ⅰ	2	2 回生以上	2 単位
	英文学史Ⅱ	2	2 回生以上	2 単位
	米文学史Ⅰ	2	2 回生以上	2 単位
	米文学史Ⅱ	2	2 回生以上	2 単位

4 専門演習Ⅰ～Ⅳ

3 回生以上の小集団科目「専門演習Ⅰ・Ⅱ」「専門演習Ⅲ・Ⅳ」は、一般に「ゼミ」と呼ばれる演習形式の授業です。授業は、少人数体制で実施され、基本的には学生の発表やディスカッションを中心に進められます。担当教員との学問を通じた知的交流を図りながら、受講生同士が相互に啓発しあい、受講生一人一人が専門的かつ能動的な学びを実現することを目的にしています。

英米文学専攻では、3 回生次のゼミ「専門演習Ⅰ・Ⅱ」については 2 回生次の 12 月、4 回生次のゼミ「専門演習Ⅲ・Ⅳ」については 3 回生次の 12 月に、それぞれゼミ選択に関する説明会を「基礎講読Ⅱ」、「専門演習Ⅱ」の授業時間内に実施しますので、必ず出席し、定められた期日までに申請・登録を行うようにして下さい。

3 回生のゼミについては、「卒業論文」で扱う予定の分野を見据えて選択することを勧めます。もちろん、2 回生秋学期の段階では具体的なテーマはまだ浮かばないと思いますが、ジャンルや作家などの方向性を基準にして選択するとよいでしょう。4 回生のゼミは卒業論文に関する指導が中心になりますので、できるだけ近い分野を専門とする教員のゼミを選択することを勧めます。ただし、卒業論文はあくまでも個人がそれぞれの批評的関心や研究テーマに基づいて完成させるものですので、担当教員の専門分野に合わせる必要はありません。各自の卒業論文を作成する上で受けた指導を基準として選択するとよいでしょう。

5 卒業論文

卒業論文は、大学における4年間の学びの総仕上げです。各自で研究テーマを設定し、専門演習や個人指導を経て研究を進め、学術論文にまとめます。卒業論文の作成に直接に取り組むのは4年生になってからですが、最近は就職活動にかなりの時間を割くことを強いられる場合もあり、できるだけ早くからテーマを絞って準備を始めることが望まれます。

すぐれた論文を執筆するには、水準の高さを支える裾野の広がりが必要であり、そのためには低年生時から数多くの英語のテキストに接し、読解力を高めることが望まれます。遅くとも3年生終了時には卒業論文で扱う研究テーマを確定し、文献収集にも取り掛かってください。

卒業論文の指導は「専門演習Ⅲ・Ⅳ」や「卒業論文」にて個人指導で行いますが、論文作成はあくまでも個人研究が中心となります。必要な文献については、図書館および文学部の文献資料室を積極的に利用すると共に、基本的なものを自分で揃える必要があります。なお論文作成の詳細については、以下の「その他」の項目を参照してください。

卒業論文審査の観点

1. 研究課題・テーマ（関心・意欲・思考・態度）
2. 研究資料・題材・先行研究（知識・理解・関心・態度）
3. 論文の展開（思考・判断・技能・態度）
4. 書式（表現・技能）

※卒業論文の評価の詳細については、提出する年度の「卒業論文」のシラバスを確認すること。

6 その他

《卒業論文作成の手引き》

はじめに

以下は「専門演習Ⅲ・Ⅳ」を履修して卒業論文を作成するための手引きとして、

1. 日程ときまり
2. 論文の体裁について
3. 論文の形式
4. 日本語論文
5. 英語論文
6. 禁止事項

の順で詳細を記し、卒業論文作成への便宜をはかるものです。

1. 日程ときまり

- (1) 卒業論文の対象となる文学作品は、原作が英語で書かれているものです。日本文学、フランス文学、ドイツ文学等の英語翻訳版は原則として対象となりません。

論文の対象を作家による作品に限定しない場合も、担当教員の指導のもとに相当量の英文テキストを対象にしなければなりません。

- (2) 卒業論文題目の提出

毎年所定の期間に manaba+R に記載の方法で提出します。文学作品を対象とする場合、取り上げる作品名を記入すること。それ以外のテキストを対象とする場合は、提出前に必ず指導教員の確認を得ること。

- (3) 審査委員

原則として2名の教員が審査にあたります。うち1名は「卒業論文」の担当教員ですが、他の1名は題目提出後に発表されます。

- (4) 論文の提出

春学期あるいは秋学期それぞれに指定された日時までに2部提出します。締め切り日時を確認し厳守すること。機器やプリンター等の故障によって提出できなかったなどは一切理由にならないので、余裕を持って完成させるよう心がけてください。

- (5) 口頭試問

提出された論文について、指定された期間内に行われます。その際取り上げた作品の使用原書、および論文のコピーを必ず持参すること。口頭試問は、提出された論文を公正に審査し的確な評価を下すのに不可欠の要件となるものですから、指定された日時に必ず出席すること。試問期間中の海外旅行、ホームステイなどは（語学研修を目的とするものも含めて）認めません。

卒業論文提出までの手続きについては、提出する年度の『履修・登録の手引き』の「『卒業論文』の提出について」を参照すること。

2. 英米文学専攻「卒業論文」の体裁について

本文の体裁	A 4 用紙（縦長） 原則としてパソコンを使うこと
縦書・横書の指定	横書
文字数に関する指定	1 行あたりの文字数：40 字 1 頁あたりの行数：35 行
枚数等に関する指定	9 枚以上 15 枚以下 英文論文の場合、A 4 用紙で、1 行あたり 65 ストローク、1 頁 25 行でタイプ、15 枚以上 30 枚以下
その他の注意	目次を巻頭に付す。注は巻末にまとめて掲げること。つづいて引用文献を巻末に付す。目次、注、引用文献、Summary 等は枚数に含めない。
表紙等に関する体裁	フラットファイル（色指定なし）
大きさ	A 4
綴じ辺	短辺綴じ（上辺綴じ）
題目用紙	manaba+R よりダウンロードし、記入の上、表紙に貼付すること。

3. 論文の形式

(1) 論文題目

提出時に、確定した論文題目を以下の要領で表紙に記します。

例（和文）

20××年度卒業論文 <i>Great Expectations</i> 研究 —Pip の精神的成長について 英米文学専攻 学生証番号 氏名	20××年度卒業論文 『大いなる遺産』研究 —ピップの精神的成長について 英米文学専攻 学生証番号 氏名
--	---

例（英文）

Functions of the Fool in <i>King Lear</i> A Thesis Presented to The Faculty of the Department of English and American Literature Ritsumeikan University In Partial Fulfillment of the Requirements for the Degree of Bachelor of Arts by RITSUMEI Hanako 1675 × × × × × × - × December 20××
--

(2) 目 次

章分けして巻頭に目次をつけます。原則として各章にタイトルをつけます。

(3) 論文の構成

論文の構成は多様です。付録に紹介されている文献や、『立命館文学』、『立命館英米文学』、その他国内外の学術雑誌に収められている論文を日ごろ読んで、参考にするのがよいでしょう。

論題の提示、その展開、そして結論、少なくともこれら3つの部分は、どのような論文にも含まれています。明確な問題意識に根ざした、実証的な論証がなされるべきです。

(4) 引用と注

和文論文においては、英文の書物（作品・研究書）からの引用は日本語に自訳して本文に入れ、原文を注に示します。ただし英語表現の細かい部分を論じようとするときなどは、原文のままで本文中に引用する場合もあるでしょう。その時は自訳を注に記します。既訳を参照した場合はその旨注に明記してください。

注は番号順に巻末に付します。注には引用の出所（著者名、書名、出版社、出版年、頁数）を明記してください。

ただし、劇作品からの引用の出所は何幕何場とし、詩劇であれば行数も示します。詩作品からの引用の場合は行数を示します。長詩では巻・篇数などと共に行数を示します。

他人の説を引用あるいは参照した時は、下の例のように注によって出所を明示しなければなりません。本文のその箇所に注番号をつけ、出所を巻末注に明記します。

(5) 引用文献表

巻末に引用文献表をつけ、(扱った作品の使用した版を含む) 引用した文献を以下の書式に従い全て列挙します。

①著者名、書名、出版情報（出版社と出版年）を示し、項目ごとにピリオドで区切ります。著者名については、洋書の場合は、姓を先に書くこと。

②学術論文の場合は、著者名、論文題目、学術雑誌名、巻数、号数、発行年、頁数を示します。データベースから論文をダウンロードした場合は、雑誌論文の情報のあとに、データベース名を記します。

③各項目で2行以上にわたる場合は、ぶら下げ書式で2行目以降を記します。

④文献をそれぞれの著者の姓のアルファベット順に並べます。

詳細については、下記の見本を参照してください。また、最新の『MLA ハンドブック』や *MLA Handbook* などの標準的なスタイルマニュアルを参照し、指導教員の指示に従ってください。

(見本)

引用文献

バイヤール、ピエール『アクロイドを殺したのは誰か』大浦康介訳、筑摩書房、2001年。

Eagleton, Terry. *The English Novel: An Introduction*. Blackwell Publishing, 2005.

Graham, T. Austin. "Chapter 18: Jazz." *American Literature in Transition, 1920-1930*, edited by Ichiro Takayoshi, Cambridge UP, 2018, pp. 358-72.

Grossman, Allen. "Hart Crane and Poetry: A Consideration of Crane's Intense Poetics with Reference to 'The Return.'" *ELH*, vol. 48, no. 4, 1981, pp. 841-79.

平石貴樹『アメリカ文学史』松柏社、2010年。

久保拓也『『子ども』と『障害』から考えるマーク・トウェイン』『マーク・トウェイン——研究と批評』第12巻、2013年、pp. 36-43。

Lahiri, Jhumpa. *The Namesake*. Houghton Mifflin, 2003.

—. "Unaccustomed Earth." *Unaccustomed Earth*, Knopf, 2008, pp. 3-59.

三村尚央『『わたしを離さないで』に描かれる記憶の記念物の手触りをめぐる考察』『カズオ・イシグロ「わたしを離さないで」を読む——ケアからホロコーストまで』田尻芳樹、三村尚央編、水声社、2018年、pp. 197-211。

Morrison, Toni, Mario Kaiser and Sarah Ladipo Manyika. "Toni Morrison in Conversation." *Granta*, 29 June 2017, granta.com/toni-morrison-conversation/.

Schultz, Elizabeth. "The Power of Blackness: Richard Wright Rewrites *Moby-Dick*." *African American Review*, vol. 33, no. 4, 1999, pp. 639-54. JSTOR.

- (6) 和文論文の場合、Summary（英文による要約）を提出してください。
（提出期限、提出方法等は、指導教員の指示に従うこと）

4. 日本語論文

- (1) 新しい段落を書き出す際は、必ず最初の1字分をあけます。
- (2) 行頭に符号やくりかえし記号（々）を据えてはいけません。文の終止符号が行末にきた場合は行末の文字と一緒に書き込みます。
- (3) 英文は半角とします。
- (4) 行末における英字の記入については、音節の区切り（辞書で確かめること）に注意してください。
- (5) 長い引用（3行以上）はその前後に空白の行を設け、本文より全体を1字分ずらせて書いてください。
- (6) 注番号は、最後の文字の右上に書きます。
- (7) 引用を中略するとき、和文では「……」または「—（中略）—」記号を、英文では“...”を用います。
- (8) 新しい章は4行あけて始めます。
- (9) 作品名と登場人物名は、初出の際に英語表記もかっこに入れて付します。

5. 英語論文

英米文学専攻の学生として、卒業論文を英語で書くことは大いに望ましいことです。そのためには4年生までに英文論文をできるだけ多く読み、「英語論文演習」を受講するなどして、正しい英文を書く力を十分つけておくことが前提となります。英文で書く場合でも、対象とする作品を精読して、正しく理解していることが肝要であるのは和文論文と全く同じです。書くことに自信をもっている、下書きおよび清書に十分な時間の余裕を置くことが絶対に必要な条件となります。

英文論文には、本文の書き方について和文の論文の場合とはちがった形式や約束があるので、市販の「英文論文の書き方」類（付録参照）を参考にすると同時に、担当教員に早くから助言、指導をもとめてください。なお、新しい章は4行あけて始めます。

6. 禁止事項

卒業論文を作成する際には、扱った作品以外に、様々な研究書や批評などの資料を参照することも、自説を論じるには重要です。ただし、その際には出所を必ず注などで明記しなければなりません。そうしないで参照した場合は、たとえそれが書物や雑誌からであれ、インターネットからであれ、盗用であり、けっして許されることではありません。参考にした資料は、前述の「3. 論文の形式」の「(4)引用と注」、そして「(5)引用文献表」の例にならって、両方でその出所を明記してください。

《TAについて》

TA(Teaching Assistant) にはさまざまな業務内容がありますが、学部学生に関係するものとしては以下のものがあります。

- ①授業の補助
 - ②学部学生の教学の補助
 - ③学部学生の自主的学習活動への指導・援助
 - ④卒業論文作成の助言と補助
- ・ TA は主に大学院生です。
 - ・ ③、④の業務に従事するTAは英米文学専攻共同研究室（共研）に決められた時間に勤務しています。（勤務時間割表参照）
 - ・ 学習に関することをはじめ、何か疑問がありましたら遠慮なく質問してください。



ヨーロッパ・イスラーム史専攻

1 教育内容と特色

ヨーロッパ・イスラーム史学では、時代と地域においても、またテーマにおいても、きわめて多様な範囲を扱っています。しかし、「なぜ学ぶか」という点では、次の二つのことが共通の目標となります。第一に、現代世界が歴史的にいかにして形成されたのかを、幅広い視野から理解すること。第二に、「過去」の時代を異なった社会・文化として認識し、それを「現在」の我々の社会・文化と対比することによって、人間の多様な在り方や可能性を知ること。この二つの視点から歴史を学ぶことによって、自らの思考と感性を磨き、現代社会に生きるための力を培っていくことが重要な目標です。とくにヨーロッパとイスラームの二つの文明・文化圏は長い歴史を有するだけではなく、交流と対立の歴史をくり返してきました。日本社会にとって「他者」であったこれらの文明・文化圏の歴史を理解することは、グローバル化が進む世界で生きていくために今後ますます必要不可欠となるでしょう。

以上の大きな目標に向かい、それぞれの問題意識から特定の時代、領域のテーマを見出し、そこから可能なかぎり全体を見渡せるような歴史的視野を広げていくことが大切です。専門としての歴史研究は、あくまで現代社会に生きるための広い視野を身につけ、変化に対応する鋭敏な感性を養い、異なった社会・時代への豊かな想像力を培うためにこそ、役立てなければなりません。

そのためには、以下に述べる専攻科目以外に、自分の関心や研究テーマにとって役立ちうる他専攻・他学域の科目も有機的に結びつけて学習していくことが必要です。

また、「ヨーロッパ・イスラーム」という異文化社会の歴史を学ぶ以上、「話す・聞く・読む」語学力を身に付けることが求められます。特に、外国語文献を読みこなす力は、現代社会のあらゆる分野・テーマにおいても十分な調査・研究を行うために必要不可欠です。外書講読などの授業に積極的に取り組み、慣れ親しむことで、これからの歴史研究の視野を広げていくことができます。

2 専門科目一覧

各科目の「科目概要」はmanaba+Rに掲載しています（manaba+R ログイン＞文学部生のページ＞文学部の履修＞教学の手引き）。学修を進めるに当たって、参考にしてください。

教育目標

- (1) 人間や世界の様々な文化について幅広い知識を身につけ、人文学の方法論を用いて理解をすることができる（知識・理解）
- (2) 現代・過去の社会や文化に対して多面的な関心を持ち、自らの見解を形成できる（思考・判断）
- (3) 個人や文化の多様性を認め、社会の一員として行動できる（思考・判断）
- (4) 人間や文化について関心を持ち、自らの力で課題を設定し探求する意欲を持つ（関心・意欲）
- (5) 現代社会が抱える問題に対し、大学で学んだことをもとに主体的に解決しようとする態度を持つ（態度）
- (6) 自分の調査・研究の結果や、それらをふまえた自己の見解を、口頭あるいは文章や制作物の形で表現することができる（技能・表現）

科目区分			科目名	配当回生	重複受講 可能	コア 科目	専攻 学生 のみ 受講 可	単 位 数	教育目標						履修方法	
									①	②	③	④	⑤	⑥		
専門科目	学域	入門科目（初 年次科目）	国際文化入門講義	1回生のみ		○	○	2	◎	○	○	○			履修指定	
			イスラーム学入門	1回生のみ					2	◎	○		○			
	小集団科目	研究入門Ⅰ	研究入門Ⅰ	1回生のみ		○	○	2	○	◎		○		○	履修指定	
		研究入門Ⅱ	研究入門Ⅱ	1回生のみ		○	○	2	○	◎		○		○	履修指定	
		基礎講読Ⅰ	基礎講読Ⅰ	2回生のみ		○	○	2	○	◎		○		○	履修指定	
		基礎講読Ⅱ	基礎講読Ⅱ	2回生のみ		○	○	2	○	◎		○		○	履修指定	
		専門演習Ⅰ	専門演習Ⅰ	3回生のみ	○	○		2		○	○	○	◎	○	履修指定	
		専門演習Ⅱ	専門演習Ⅱ	3回生のみ	○	○		2		○	○	○	◎	○	履修指定	
		専門演習Ⅲ	専門演習Ⅲ	4回生以上	○（注1）	○		2			○	○	○	◎	4単位必修（注2）	
		専門演習Ⅳ	専門演習Ⅳ	4回生以上	○（注1）	○		2			○	○	○	◎		
	卒業論文		卒業論文	4回生以上		○		4	○	○	○	○	○	◎	必修	
	自専攻科目	概論	ヨーロッパ史概論Ⅰ	ヨーロッパ史概論Ⅰ	1回生以上		○		2	◎	○	○				履修指定
			ヨーロッパ史概論Ⅱ	ヨーロッパ史概論Ⅱ	2回生以上		○		2	◎	○		○			履修指定
			イスラーム史概論Ⅰ	イスラーム史概論Ⅰ	1回生以上		○		2	◎	○	○				履修指定
			イスラーム史概論Ⅱ	イスラーム史概論Ⅱ	2回生以上		○		2	◎	○		○			履修指定
		講義	ヨーロッパ古代史研究	ヨーロッパ古代史研究	2回生以上				2	○	○		◎	○		
			ヨーロッパ中世史研究	ヨーロッパ中世史研究	2回生以上				2	○	○		◎	○		
			ヨーロッパ近代史研究Ⅰ	ヨーロッパ近代史研究Ⅰ	2回生以上				2	○	○		◎	○		
			ヨーロッパ近代史研究Ⅱ	ヨーロッパ近代史研究Ⅱ	2回生以上				2	○	○		◎	○		
			ヨーロッパ現代史研究Ⅰ	ヨーロッパ現代史研究Ⅰ	2回生以上				2	○	○		◎	○		
			ヨーロッパ現代史研究Ⅱ	ヨーロッパ現代史研究Ⅱ	2回生以上				2	○	○		◎	○		
			イスラーム前近代史研究Ⅰ	イスラーム前近代史研究Ⅰ	2回生以上				2	○	○		◎	○		
			イスラーム前近代史研究Ⅱ	イスラーム前近代史研究Ⅱ	2回生以上				2	○	○		◎	○		
			イスラーム近現代史研究Ⅰ	イスラーム近現代史研究Ⅰ	2回生以上				2	○	○		◎	○		
			イスラーム近現代史研究Ⅱ	イスラーム近現代史研究Ⅱ	2回生以上				2	○	○		◎	○		
			ヨーロッパ・イスラーム関係史	ヨーロッパ・イスラーム関係史	2回生以上				2	○	◎		○	○		
			アラビア語入門	アラビア語入門	2回生以上				2	○	○	◎		○	○	
		講読	ヨーロッパ・イスラーム史基礎文献講読	ヨーロッパ・イスラーム史基礎文献講読	1回生以上				2	◎	○	○	○		○	
			ヨーロッパ・イスラーム史文献講読Ⅰ	ヨーロッパ・イスラーム史文献講読Ⅰ	2回生以上	○		○	2	○	◎	○	○		○	履修指定
			ヨーロッパ・イスラーム史文献講読Ⅱ	ヨーロッパ・イスラーム史文献講読Ⅱ	2回生以上	○		○	2	○	◎	○	○		○	
			アラビア語文献講読	アラビア語文献講読	3回生以上	○			2	○	○	○		◎	○	
	演習		デジタル歴史研究	デジタル歴史研究	2回生以上				2	○	○			◎		

1回生配当の「国際文化入門講義」「研究入門Ⅰ・Ⅱ」は、学域に所属する学生のみ受講可能とします。

注1) 重複受講が可能となるのは、年度を越えて同一セメスターで履修する場合に限ります。

注2) 専門演習Ⅲ・Ⅳについては合計で4単位までしか履修できません。

3 履修方法

【必修科目】卒業するために必ず単位を修得しなければならない科目

科目区分	科目名	単位数	配当回生	履修方法
小集団科目	専門演習Ⅲ	2	4回生以上	4単位必修
	専門演習Ⅳ	2	4回生以上	
卒業論文	卒業論文	4	4回生以上	4単位必修

【履修指定科目】必ず登録・受講しなければならない科目

科目区分	科目名	単位数	配当回生	履修方法
入門科目 (初年次科目)	国際文化入門講義	2	1回生のみ	2単位
小集団科目	研究入門Ⅰ	2	1回生のみ	2単位
	研究入門Ⅱ	2	1回生のみ	2単位
	基礎講読Ⅰ	2	2回生のみ	2単位
	基礎講読Ⅱ	2	2回生のみ	2単位
	専門演習Ⅰ	2	3回生のみ	2単位
	専門演習Ⅱ	2	3回生のみ	2単位
概論	ヨーロッパ史概論Ⅰ	2	1回生以上	2単位
	ヨーロッパ史概論Ⅱ	2	2回生以上	2単位
	イスラーム史概論Ⅰ	2	1回生以上	2単位
	イスラーム史概論Ⅱ	2	2回生以上	2単位
講読	ヨーロッパ・イスラーム史文献講読Ⅰ	2	2回生以上	2単位

4 専門演習Ⅰ～Ⅳ

1回生から4回生まで、卒論作成という到達目標のために中心となる場が、演習（ゼミナール、略称ゼミ）です。演習はお互いの調査・研究の成果を発表・討論しあうことによって、相互に知見と認識を交換する学びの共同性の場です。そのなかで、自分一人の研究では実現できないような相互の発見と知的興奮を体験し、お互いを高めあうことができます。また、単純なことです。演習での討論を通じて他人の語りに耳を傾け、それに応答するというコミュニケーションの基本、モラルを身につけてほしいと思います。

5 卒業論文

卒業論文は、大学における4年間の学びの総仕上げです。各自で研究テーマを設定し、専門演習や個人指導などを経て研究を進め、学術論文にまとめます。卒業論文の作成に直接取り組むのは4回生になってからですが、最近では就職活動にかなりの時間を割くことを強いられる場合もあり、できるだけ早くからテーマを絞って準備を進めることが望まれます。

すぐれた論文を執筆するには、水準の高さを支える視野の広がりが必要であり、そのためには低回生時からさまざまなテーマの、そして数多くの研究書や論文を収集・読解して、その内容やこれまでの研究の流れ（研究史）を把握しておくことが不可欠です。遅くとも3回生終了時には卒業論文で扱う研究テーマを確定し、文献収集にも取りかかってください。また就職活動中にも機会を捉えて、文献収集や読解を進めることを心がけてください。

卒業論文の指導は「専門演習Ⅲ・Ⅳ」や「卒業論文」（授業）、あるいは個人指導などを通じておこないますが、

論文作成はあくまでも個人での研究が中心となります。必要な文献・資料については図書館や文献資料室などを積極的に利用するとともに、他大学・機関からの取り寄せ、そして基本的なものについては自分で揃える必要があります。

論文作成の詳細については、以下の「その他」の項目を参照してください。

卒業論文審査の観点

1. 研究課題・テーマ（関心・意欲・思考・態度）
2. 先行研究・研究資料・註記（知識・理解・関心・態度）
3. 論文の展開（思考・判断・技能・態度）
4. 書式（表現・技能）

※卒業論文の評価の詳細については、シラバスで提出年度の「卒業論文」に記載されている説明を確認すること。

6 その他

《卒業論文作成のためのガイドライン（概要）》

以下では、「専門演習Ⅲ・Ⅳ」「卒業論文」を履修して卒業論文を作成するための、書式を中心とした概略を記述しています。ただし年度によって若干の修正や変更がありますので、卒業論文を実際に作成する際には、4回生時（あるいは卒業予定の年度）に配布される「卒業論文のしおり」を必ず参照して、その指示にしたがってください。ここで記されているのはあくまでも諸君の「入学時点での概略」です。

1. スケジュール

(1) 卒業論文題目の提出

毎年所定の時期に、manaba+Rに記載の方法で提出すること。提出前に必ず指導教員と面談し、確認をとること。提出後の変更は原則として認めない。

(2) 審査委員

2名の教員で審査をおこなう。そのうち1名は原則として「卒業論文」の担当教員。もう1名は提出された題目をもとに判断し、決定・発表される。

(3) 論文提出

☆指定された日時までに2部提出する。締切日を事前に確認しておくこと。また締切後の提出は（たとえ1分の遅れでも）一切認められない。また提出した卒業論文に何らかの規定上の不備がある場合も、提出が認められない場合があるので注意すること。

☆データが消えて提出できなくなることを防ぐため、バックアップは頻繁に、複数とっておくこと。

☆提出最終日に卒論を提出する際には印刷場所に留意し（学内は非常に混雑します）、確実かつ迅速に印刷ができる場所で印刷すること。

(4) 口頭試問

提出された論文について、指定された期間内（例年1月末～2月上旬）におこなわれる。その際、提出した卒論（コピーでも可）を1部、自分の参照用として必ず持参すること。試問期間中に他の予定は入れず、指定された日時に必ず指定された場所に来ること。

2. 卒業論文の体裁（概略）

(1) 一般的な注意点

☆手書きは不可。正本と副本の2部必要（2部提出）。その他、自分用にもう1部準備しておき、試問の際に持参すること。

☆字数は本文 1 万 2000 字以上 2 万字以下。ただし 1 万 5000 字以上書くのが望ましい。本文の最後に本文の字数を記入する。

☆用紙左部に 2 つ穴のパンチで穴を開けて、A4 横綴じのフラットファイルで綴じる。色は水色。

(2) 体裁

☆ A4、縦長。手書きのものは認めない。横書き。本文は両端揃えにする。

☆横に 1 行あたり 40 字、1 ページあたり 25 行入れて、1 ページに 1,000 字入るようにレイアウトの設定をおこなう。

☆本文は明朝系フォントを利用する。ゴシック系フォントは章名・節名などの見出し部分に利用する。欧文も、本文はセリフ系フォントを利用する。本文のフォントサイズは 11 あるいは 10.5 ポイント。

☆製本の際に隠れてしまうのを防ぐため、用紙の左部 3.0[cm] 程度には余白を空ける。上下部は 3.0[cm] 程度以上、右も 2.5-3.0[cm] 程度あける。

☆各ページにはページをふる。ページ番号は下部 1.5[cm] 程度のところの中央につけること。ページ番号は本文と同じフォント、半角算用数字。表紙や目次にはページ番号をつけない。

☆表紙には大学名、「〇〇年度卒業論文」という語句、題目、学部・専攻名、提出年月（〇〇年●●月）、学生証番号、姓名を書く。すべて中央揃えに設定。表紙にはページ番号は記載しない。

☆目次には各章・各節（さらに細かい小見出しなどがある場合にはそれも）と、その開始ページを明記する。参考文献目録や参考資料の開始ページも明記する。ページ番号は記載しない。

☆注は、脚注方式。文末脚注にはしないこと。

☆参考文献目録は、卒業論文作成に利用したものをすべて挙げる。文献は、基本的には姓のアルファベット順、または 50 音順（日本人の場合）。古代史などで、ギリシア語・ラテン語・アラビア語の原典やその翻訳（一次資料）を利用した場合には、現在の著作（研究文献）と分ける。

☆地図などの参考資料もできる限りつける。その場合、出典を必ず明記する。

☆各章は、必ずページの最初からはじめること（各章の終わりで必ず改ページする）。

(3) 文章表現

☆略字は使用しない。

☆繰り返し記号「ヽ、ゞ」などは利用しない。

☆強調を示す場合には傍線、傍点、「」（カギカッコ）などを利用する。

☆脚注は基本的には出典の指示などを中心とする。補足説明を脚注でおこなってもよいが、冗長にならないように注意する。

☆むやみに難しい用語を使わない。高校生が理解できるレベルの議論と文章を心がけること。

(4) 書名・論文名

☆日本語文献の場合、著作名・雑誌名・新聞名は二重カギカッコ『』でくくる。

☆日本語文献の場合、論文名はカギカッコ「」でくくる。

☆欧語文献の場合、著作名・雑誌名・新聞名はイタリックにする（論文はしない）。

☆欧語文献の場合、論文名は引用符“ ”でくくる。博士論文（Ph. D. thesis）も論文として扱い、学位を出した大学名も付記する。

(5) 人名の扱い

☆姓（通称）と名の区切りは「＝（イコール）」か、「・（なかぐろ）」を使う（いずれかに統一すること）。

☆必要に応じて生没年、在位年、在職年などを（）でくくって示す。国王・皇帝などの場合は初出時に在位年を示すこと。また必要に応じて、生年・没年などの情報を付加する。

(6) 数字・年代

☆数字は半角算用数字を用いる。

☆数字の幅はハイフン（-）を用いる。長音を示す（ー）と混同しないよう注意すること。なお、紀元前の場合は「前」を数字の前につける。紀元後の場合も、1 世紀に関しては「後」をつける。

(7) 引用

☆本文中に引用を組み込む場合には「」でくくる。引用文中の「」は『』に変更する。

☆引用文を改行して示す場合には、引用文全体を2文字分下げる。この場合は「」でくくらない。

☆一次史料を引用する場合、他の人による日本語訳を引用するときには脚注での（通常の参考文献の書式にしたがった）指示に加え、訳者を引用文末で（ ）に入れて示すほうがよい。

(8) 脚注での表現

①日本語文献での出典提示

☆本の場合は

著者あるいは編者（訳者）『題一 副題一』出版社、刊行年、参照・引用する頁。
の順番・書き方となる。

☆雑誌論文の場合は

著者（訳者）「題一副題一」『雑誌名』巻 - 号、年代、全体の頁、参照・引用する頁。
の順番・書き方となる。

☆論文集などの本に収録されている論文は

著者「題一副題一」編者『著作名』出版社、年代、全体の頁、参照・引用する頁。
の順番・書き方となる。

②欧語文献の場合

☆本の場合は

著者名・編者名、著作名：副題、発行地：出版社、発行年、頁
の順番・書き方となる。

☆雑誌論文の場合は

著者名・編者名、論文名：副題、雑誌名、巻号・発行年（カッコでくくる）、全体頁、引用頁
の順番・書き方となる。

☆論文集などの本に収録されている論文は

著者名・編者名、論文名：副題，in: 編者名、著作名：副題、発行地：出版社、発行年、全体頁、引用頁
の順番・書き方となる。

☆巻号の vol., no. は省略し、巻が号に細分されている場合はハイフンを利用する（例えば volume 75 number 4 の場合は 75-4）。発行年は巻号の直後にカッコでくくって入れる。

☆古典資料や聖書のように、章・節での引用が一般化している場合は、章・節で引用元を示し、ページの引用を行わなくてもよい（出版データの引用も省略可能）。

☆一つの脚注で複数の欧語文献を提示する場合には、セミコロン（;）を入れる。

☆複数巻の著作の発行年は「最初の発行年 - 最後の発行年」と表記する。

☆参照を表すときには cf. を用いてもよい。

☆実際には読んでいない欧語文献の書誌情報を（実際に読んだ文献からの情報に基づいて）脚注に記載する場合は、書誌情報の後に（筆者未見）と付し、典拠とした文献の書誌情報とページを cf. の後に付すこと。

(9) 略号

☆文献が重複する場合には、文献が初めて言及される個所で略号を示して、以降の脚注で用いる。略号は分かりやすいものにすること。

(10) 参考文献目録

☆文献目録は一次資料、研究文献別に作成する。欧語文献は著者・編者の姓（ファミリーネーム）のアルファベット順、邦語文献は著者・編者の姓の 50 音順で並べる。同一著者の文献・論文は年代順に並べる。

☆雑誌名などを略記する場合には、文献目録冒頭に略号一覧（Abbreviation）をのせること。なお一般的に用いられている略号がある場合はそれに従う。略号表は海外の雑誌や事典などに掲載されている。

☆ウェブページからの引用を行った場合には、URL（アドレス）と最終閲覧日を明記する。CD-ROM/ DVD などを利用する場合も、その旨を明示する。



文化芸術専攻

1 教育内容と特色

20 世紀は人類世界に大きな変化をもたらしました。かつて夢一杯に語られていた 21 世紀も、いまや先行きの見えない不安にみちた揺れ動く世界になってしまいました。このような状況下で、既成の価値観や生き方に疑問が投げかけられるのは必然といえるでしょう。大学における学問のあり方の問い直しも、そうしたラディカルな問題のひとつです。私たち文化芸術専攻は、すさまじい速度で流動し変化をとげていく世界がかかえる様々な問題に、これまでの学問の枠組みを超えて応えようとする領域です。そのため、「学際的」な立場からものごとにアプローチすることを目的としています。すなわち、さまざまな言語で綴られた物語・宗教信仰・ファッション・暴力といった人間の営み自体や、そこで用いられる象徴・音楽・絵画・建築・マンガといった芸術による表象など、多様な文化の交渉や変容のあり方に対して、文化人類学、芸術学、社会学、歴史学、言語学、文学といった学問の中から、ある特定の専門分野を出発点におきながら、それとは別の分野の知見を取り入れ、より広く多様な視点からものごとを横断的にとらえ考察していこうという研究方法を重視します。そのようなアプローチを自らのものとすることは容易ではないかもしれませんが、しかし、自分が世界に向きあうために必要な「ユニークな批判的経験」や、従来の学問分野からは生まれてこなかった「新しい発見」といった、かけがえのない成果は、こうした取り組みの先に出会うことができるはずです。

2 専門科目一覧

各科目の「科目概要」は manaba+R に掲載しています（manaba+R ログイン＞文学部生のページ＞文学部の履修＞教学の手引き）。学修を進めるに当たって、参考にしてください。

教育目標

- (1) 人間や世界の様々な文化について幅広い知識を身につけ、人文学の方法論を用いて理解をすることができる（知識・理解）
- (2) 現代・過去の社会や文化に対して多面的な関心を持ち、自らの見解を形成できる（思考・判断）
- (3) 個人や文化の多様性を認め、社会の一員として行動できる（思考・判断）
- (4) 人間や文化について関心を持ち、自らの力で課題を設定し探求する意欲を持つ（関心・意欲）
- (5) 現代社会が抱える問題に対し、大学で学んだことをもとに主体的に解決しようとする態度を持つ（態度）
- (6) 自分の調査・研究の結果や、それらをふまえた自己の見解を、口頭あるいは文章や制作物の形で表現することができる（技能・表現）

科目区分		科目名	配当回生	重複受講可能	コア科目	専攻学生のみ受講可	単位数	教育目標						履修方法
								①	②	③	④	⑤	⑥	
専門科目	学域	入門科目 (初年次科目)	国際文化入門講義	1 回生のみ		○	2	◎	○	○	○			履修指定
			イスラム学入門	1 回生のみ			2	◎	○		○			
	小集団科目	研究入門Ⅰ	1 回生のみ		○	○	2	○	◎		○		○	履修指定
		研究入門Ⅱ	1 回生のみ		○	○	2	○	◎		○		○	履修指定
		基礎講読Ⅰ	2 回生のみ		○	○	2	○	○			◎	○	履修指定
		基礎講読Ⅱ	2 回生のみ		○	○	2	○	○			◎	○	履修指定
		専門演習Ⅰ	3 回生のみ	○			2	○			○	○	◎	履修指定
		専門演習Ⅱ	3 回生のみ	○			2	○			○	○	◎	履修指定
		専門演習Ⅲ	4 回生以上	○ (注 1)			2	○			○	○	◎	4 単位必修 (注 2)
		専門演習Ⅳ	4 回生以上	○ (注 1)			2	○			○	○	◎	
	卒業論文		卒業論文	4 回生以上			4	○	○	○	○	○	◎	必修
専門科目	自専攻科目	概論	文化芸術概論	1 回生以上			2	◎	○		○	○		
		講義	現代ヨーロッパ論	2 回生以上			2	○	○	○		◎		
			説話文学論	2 回生以上			2	○	○	◎	○			
			比較文学論	2 回生以上			2	○	○	◎	○			
			日本・東洋美術史	2 回生以上		○	2	◎	○	○	○			
			仏教と美術	2 回生以上			2	○	○	◎	○			
			西洋美術史	2 回生以上		○	2	◎	○	○	○			
			ヨーロッパの建築・デザイン	2 回生以上			2	○	○	◎	○			
			西洋音楽史	2 回生以上		○	2	◎	○	○	○			
			ポストコロニアル文化論	2 回生以上			2	○	○	○		◎		
			グローバルヒストリー	2 回生以上			2	○	◎	○		○		
			宗教とイメージ	2 回生以上			2	○	○	◎	○			
			テクノロジーと文化変容	2 回生以上			2	○	○	◎	○			
			言語と社会	2 回生以上			2	○	◎	○		○		
			民族と芸術	2 回生以上			2	○	○	◎	○			
			文化交流論	2 回生以上		○	2	◎	○	○	○			
			ジェンダーと文化	2 回生以上			2	○	◎	○		○		
			地域と移動	2 回生以上			2	○	◎	○		○		
			音楽と社会	2 回生以上			2	○	○	◎	○			
			現代美術論	2 回生以上			2	○	○	◎	○			
			表象とメディア	2 回生以上			2	○	○	○		◎		
			ヨーロッパ文化史	2 回生以上			2	○	○	◎	○			
			キリスト教文化史	1 回生以上			2	○	◎	○		○		
			フランス語圏の文学	2 回生以上			2	○	○	◎	○			
			ドイツ語圏の文学	2 回生以上			2	○	○	◎	○			
			パフォーマンス・アート論	2 回生以上			2	○	○	◎	○			
			文化人類学	2 回生以上			2	○	◎	○		○		
			翻訳と文化	2 回生以上			2	○	◎	○		○		
			色彩文化論	2 回生以上			2	○	○	◎	○			

科目区分			科目名	配当回生	重複受講 可能	コア 科目	専攻学 生のみ 受講可	単 位 数	教育目標						履修方法
									①	②	③	④	⑤	⑥	
専門科目	自専攻科目	講読	英書リーディングⅠ	2回生以上				2	○	○		◎	○		4単位履修指定
			英書リーディングⅡ	2回生以上				2	○	○		◎	○		
			外国語文献リーディングⅠ	1回生以上	○			2	○	○		◎	○		
			外国語文献リーディングⅡ	1回生以上	○			2	○	○		◎	○		
			英書リーディングⅢ	3回生以上				2	○	○		◎	○		
			英書リーディングⅣ	3回生以上				2	○	○		◎	○		
			外国語文献リーディングⅢ	2回生以上	○			2	○	○		◎	○		
		外国語文献リーディングⅣ	2回生以上	○			2	○	○		◎	○			
	特殊講義	文化芸術特殊講義	2回生以上	○			2	○			◎	○	○		
	エリアスタディ イタリア	講義	イタリアの文化とエクスプレッションⅠ	2回生以上				2	○	○		◎		○	
			イタリアの文化とエクスプレッションⅡ	2回生以上				2	○	○		◎		○	
			イタリアの文化とエクスプレッションⅢ	3回生以上				2	○	○		◎		○	
			イタリアの文化とエクスプレッションⅣ	3回生以上				2	○	○		◎		○	
			イタリアの文化とコミュニケーションⅠ	2回生以上				2	○	○		◎		○	
			イタリアの文化とコミュニケーションⅡ	2回生以上				2	○	○		◎		○	
			イタリアの文化とコミュニケーションⅢ	3回生以上				2	○	○		◎		○	
			イタリアの文化とコミュニケーションⅣ	3回生以上				2	○	○		◎		○	
			イタリア文化研究	2回生以上				2	○			◎	○	○	
			イタリア文化講義Ⅰ	2回生以上				2	○			◎	○	○	
			イタリア文化講義Ⅱ	2回生以上				2	○			◎	○	○	

1 回生配当の「国際文化入門講義」・「研究入門Ⅰ・Ⅱ」は、学域に所属する学生のみ受講可能とします。

注1) 重複受講が可能となるのは、年度を越えて同一セメスターで履修する場合に限ります。

注2) 専門演習Ⅲ・Ⅳについては合計で4単位までしか履修できません。

3 履修方法

【必修科目】卒業するために必ず単位を修得しなければならない科目

科目区分	科目名	単位数	配当回生	履修方法
小集団科目	専門演習Ⅲ	2	4回生以上	4単位必修
	専門演習Ⅳ	2	4回生以上	
卒業論文	卒業論文	4	4回生以上	4単位必修

【履修指定科目】必ず登録・受講しなければならない科目

科目区分	科目名	単位数	配当回生	履修方法
入門科目 (初年次科目)	国際文化入門講義	2	1回生のみ	2単位
	リテラシー入門	2	1回生のみ	2単位
小集団科目	研究入門Ⅰ	2	1回生のみ	2単位
	研究入門Ⅱ	2	1回生のみ	2単位
	基礎講読Ⅰ	2	2回生のみ	2単位
	基礎講読Ⅱ	2	2回生のみ	2単位
	専門演習Ⅰ	2	3回生のみ	2単位
	専門演習Ⅱ	2	3回生のみ	2単位
講読	外国語文献リーディングⅠ	2	1回生以上	2科目4単位以上選択
	外国語文献リーディングⅡ	2	1回生以上	
	英書リーディングⅠ	2	2回生以上	
	英書リーディングⅡ	2	2回生以上	

4 専門演習Ⅰ～Ⅳ

「専門演習Ⅰ～Ⅳ」は3、4回生合同によるゼミ形式で、卒業論文にまとめることを目標として各自の問題を展開していきます。多様な問題意識に応えつつ、3、4回生において関心を絞ると同時に総合性・学際性を追求するという目標を実現するため、複数の演習への登録が認められます。したがって意欲ある学生は自分のテーマを複数の教員の指導で、複数の視点から深めることが可能になります。演習は各領域の担当者ばかりでなく、可能な範囲で文化芸術専攻以外の担当者にも開設してもらい、多様性をもたせるよう工夫されています。したがって、自分の志向する学問領域の担当者だけに限定せず、枠を広くとってよく考えて選択してください。

1、2回生の間に、様々な機会を通じてどの教員の演習を選択するのが自分の関心にとってもっとも適切か、また一つの研究分野に限定せずに演習を選択するとすれば、どのような組み合わせでとるべきか、よく考えて2回生の1月に提出する専門演習登録申請に備えてください。より詳細な説明は次年度ゼミ選択のための説明会の時に行います。

5 卒業論文

小集団教育を軸とした自主的学習の総仕上げとして卒業論文があります。論文作成に必要な文献や資料などを適切に収集して取捨選択し、それを応用できる能力を実践的に高めていきます。具体的には、4年間の学問的研鑽の集大成として、自己の研究の成果を論文のかたちで表現できる能力、その際の適切な文章表現能力、的確に口頭でも自己の意見を表現できる能力などを養います。

詳細については、このあとに掲載している「卒業論文の栞」を参照してください。

卒業論文審査の観点

1. 研究課題・テーマ（関心・意欲・思考・態度）
2. 研究資料・題材・先行研究（知識・理解・関心・態度）
3. 論文の展開（思考・判断・技能・態度）
4. 書式（表現・技能）

※卒業論文の評価の詳細については、提出する年度の「卒業論文」のシラバスを確認すること。

6 その他

卒業論文の栞

文化芸術専攻「卒業論文」の体裁について

原稿用紙に手書きする場合	A 4 判「立命館大学論文用紙」(縦長)
縦書・横書の指定	横書
枚数	400 字原稿用紙換算で 30 枚以上、50 枚程度を目途とする。上限はもうけない。
その他の注意	黒または青のペンを使用すること。
パソコンを使う場合	A 4 判白紙 (縦長)
縦書・横書の指定	横書
文字数に関する指定	1 行あたりの文字数・1 頁あたりの行数：指導教員の指示に従うこと。
枚数等に関する指定	400 字原稿用紙換算で 30 枚以上、50 枚程度を目途とする。上限はもうけない。
その他の注意	上下左右のマージンが 2 ～ 3 cm 1 頁あたりの文字数が 1,200 ～ 1,400 字 文字は 10 または 10.5 ポイント程度の大きさに、明朝などの一般的フォントを使うこと。
表紙等に関する体裁	指導教員の指示に従うこと。
大きさ	A 4
綴じ辺	短辺綴じ (上辺綴じ) もしくは長辺綴じ (左辺綴じ)
題目用紙	manaba+R よりダウンロードし、記入の上、表紙に貼付すること。
部 数	3 部作成し、2 部を提出する。(1 部は本人手元保存)

卒業論文提出までの手続きについては、提出する年度の『履修・登録の手引き』の「卒業論文の提出について」を参照して下さい。

卒業論文の提出について

目 次

- 1 体裁と手続き——最低限これだけはクリアしないと受理されません。
 - 1-1 用紙／書式／字数の制限
 - 1-2 構成——内表紙、要約、目次、本文、註、参考文献、図表・資料
 - 1-3 綴じ方（ファイル、おもて表紙の表記、etc.）
 - 1-4 題目の届け出
 - 1-5 提出
 - 1-6 口頭試問
- コラム——「共同研究室より」

- 2 文献表記のきまり——もう少しカタチにこだわってみる。

- 3 卒業論文を書く意味

1 体裁と手続き——最低限これだけはクリアしないと受理されません。

この栞〔しおり〕は、卒業論文を執筆・提出しようとする文化芸術専攻のゼミ受講生のために、初歩的かつ不可欠な形式的条件を中心に整理した手引きです。

この第1節ではまず、「体裁」と「手続き」について説明します。

使用する用紙・書式・構成などに係る指定や、題目の届け出と最終提出に係る手続きは、これだけはクリアしないと卒業論文として受領されない必要最低条件ですから、いずれについても遺漏のないよう心がけてください。（体裁については、共同研究室にサンプルが用意されていますので、それを参考にしてください。）

1-1 用紙／書式／字数の制限

1-1-1 用紙

A 4判の用紙の片面のみ、縦位置、横書きでを使用することを基本とします。

論文のテーマが縦書きを要請する場合は、個別に指導教員の指導を受けてください。

1-1-2 書式

細かな書式は、手書きの場合（1-1-2-1）と、パソコンを使用する場合（1-1-2-2）で、以下のように異なりますが、いずれの場合も、各頁の下部に頁番号（全体中の一連番号）を付さねばなりません。

1-1-2-1 原稿用紙を使用する場合

400字詰め立命館大学論文用紙（生協で取り扱っている）に、黒もしくは青のペンをもちいて清書します。（鉛筆書きの場合は濃い字で書いたものの鮮明なコピーしか認められません。）

1-1-2-2 パソコンを使用する場合

上下左右ともに2～3cmの余白をとります。字の大きさは10あるいは10.5ポイント程度、フォントは（特別な理由がない限り）明朝などの一般的なものがのぞましいでしょう。これで1行の字数は35字～40字、頁の行数を30行程度とすれば、1枚あたりの字数が1000～1200字程度となります。

なお、感熱紙は変色のおそれがあるので、コピーをとったものを提出してください。

1-1-3 字数の制限

本文（注を含まない）の分量については、400字詰め原稿用紙換算で30枚以上という下限と、50枚程度という緩やかな上限を設けています。

パソコンを使用する場合も、400字詰め原稿用紙に換算してその字数制限を守る必要があります。それが守られていることの目安として、本文末に以下の記載を加えるようにしてください——すなわち、字数のカウントが可能なパソコンの場合はその表示された字数を、カウント機能のないパソコンの場合は

〔1行の字数×行数＝空白も含めた合計字数〕の計算式を、それぞれ最終行のカッコ（ ）内に記します。

なお、上限を超える量の執筆が見込まれるようなら、個別かつ事前に指導教員に相談してください。

1-2 構成

ファイルとして綴じられた論文（綴じ方は次項〔1-3〕を参照）の中味は、

内表紙

要約

目次

本文

註

参考文献

付録・資料等

の順で構成されます。（後述しますが〔1-3〕、こうして構成され綴じられた同一の論文を3部作成しなければなりません。）

なお、これらのうち、第2節で詳論する「註」および「参考文献」以外の項にかんする注意事項は、以下のとおりです。

1-2-1 内表紙

ファイルのおもて表紙〔1-3-2〕に準じるものを、内表紙として第1頁におきます。具体的には、

「20●●年度文学部卒業論文」の表記

論文題目（副題がある場合は改行して記載）

学生証番号

氏名

が明記されている必要があります。

1-2-2 要約

800字程度の量を目安に、論文の本文を要約します。

1-2-3 目次

本項で触れる要約から資料等にいたる項目に加え、本文については章（あるいは節）にいたるまでの構成も記して、それらすべての項目に、頁番号を記します。

1-2-4 本文

第1章、第2章、…と複数の章をもって構成し、論理的に論述を進める必要があります。

また、それら複数章による部分を本論とした枠の両端に「序」（あるいは「はじめに」）と「結び」（あるいは「おわりに」）をおいて、それぞれに問題の所在や今後の展望を記すのもよいでしょう。

さらに本論も、章のみでなく、階層構造を意識した部・章・節の区分を設けることも可能ですし、ときに必要ですらあるでしょう。

いずれにしても、本文の構成は考察の内容と不可分の関係にあるものですから、教員の指導を受けながら慎重に決定することが重要です。

〔1-2-5の項として扱われるべき「註」については、2に詳述〕

〔1-2-6の項として扱われるべき「参考文献」については、2に詳述〕

1-2-7 図表・資料等

図表は、一連番号を付しそれぞれ簡潔なタイトルや説明もつけたうえで、本文中の参照している位置に貼り込むか、独立した頁にして本文中に綴じ込みます。単位などを忘れないことはもちろんですが、線も実線、鎖線、一点鎖線などを用い、多色による区別は避けるようにします（特別な理由がない限りモノクロで出力します）。

また、論文に添付される資料類がファイルに綴じるのに適さない量や大きさを有する場合は、前もって指導教員の指示を仰いでください。

1-3 綴じ方（ファイル、おもて表紙の表記、etc.）

以下の条件に沿ったサンプルを共同研究室に用意していますので、参考にしてください〔この節のあとのコラムも参照〕。

1-3-1 綴じ方

上の1-2の項の説明にそって構成された中味を、ファイル（生協で取り扱っている）で綴じます。これと同一のものを3部作成します [1-5も参照]。ファイルについては指導教員の指示にしたがってください。

1-3-2 おもて表紙

manaba+Rより題目用紙をダウンロードし、記入の上、表紙に貼付して下さい。なお、主査・副査の教員名は自由に選べるのではなく、卒論の題目届け出を受けて決定され、manaba+Rに掲出されるものを正確に記載しなければなりません [1-4を参照]。

1-3-3 背表紙

ファイルの背表紙にも、年度、題目、氏名を記します。

1-4-1 題目の届け出

「卒業論文題目届」が所定の締切以前に届け出られている必要があるのはいうまでもありませんが、指導教員との事前の打ち合わせもそれにおとらず重要です。（当然すぎて、あえて理由を記すまでもないほどですが、次項に記す主査・副査の確定作業に支障をきたす可能性を付記しておきます。）

1-4-2 主査・副査の確定

上記の届け出をうけた論文審査の主査・副査は、manaba+Rに掲出されます。論文提出時には、ファイル表紙裏の審査教員用紙に正確にその教員名を記してください [1-3-3を参照]。

1-5 提出

提出締切は厳守するように。（受け付け期間は約1週間あります。さほど余裕をもって完成はさせられないにせよ、自身で早めの締切を想定して作業を進めるくらいで、むしろちょうどよいでしょう。）交通機関の遅延、パソコンやプリンタの故障など、いかなる事由によっても締切後は受理されません。

なお、3部作成した同一の論文のうち、実際に提出・受理されるのは2部で、残りの1部は執筆者であるあなたの手元に残ることになります（*）。口頭試問 [1-6] に向けて自身で再度それを読み直し、また試問時にはそれを持参するようにしてください。

（*原稿用紙を使用する場合は、原版1部とコピー2部で計3部とし、このうち原版1部とコピー1部を提出します。）

1-6 口頭試問

論文を提出しても、その後に実施される口頭試問を受けなければ単位認定されません（卒業できません）。試問の日時・場所は、manaba+Rに掲出されます。

コラムー「共同研究室より」

- 共同研究室には、決められた時間帯にTA（ティーチング・アシスタント）が詰めるようになっています。誰もが卒業論文のハードルをクリアした経験の持ち主ですから、不明な点があれば相談してもよいでしょう。ただし、アドバイスできることがあるとしても、教員による指導に直接代わるものではありませんから、その点を留意し、また基本的にこの「栞」に当たって調べることを先行させてください。
- 本文中にも記したとおり [1-3]、共同研究室には、最低限の体裁を整えたサンプルが用意されています。実際に手にとって、不明な点の解消に役立ててください。
- 共同研究室内には数台のパソコン等が設置され、学生諸君の日々の利用に供されていますが、卒業論文の提出間近になると多くの利用希望者で混雑するなどして、逆にさまざまな不具合が発生させかねません。論文の執筆は計画的に進め、また、USBメモリーの置き忘れ等のないように、論文データの管理にも注意しましょう。なお、2穴パンチなどの文具は、随時利用してかまいません。

2. 文献表記のきまり——もう少しカタチにこだわってみる

この第2節では、文献の引用やその書誌情報の掲出にあたっての形式的要求（統一や慣例の踏襲など）について触れます。

論文がいわゆる創作やエッセイと異なるゆえんは、何よりもそれが先行研究の渉獵・整理・読解・批判の作業のうえにたっている点に尽きます。

この書誌情報の表記の仕方は、研究領域ごとにそれぞれに慣例がある一方で（きわめて厳格にそれを守ること

を求める領域もあればそうでない領域もあります)、それ以外に自身が依拠する方法で一貫した記述がなされていることが肝要です。

さて、複数の学問領域（ディシプリン）の混成体としてある文化芸術専攻としては、それら領域ごとに微妙に異なる表記法のすべてを網羅できるものではありません。註や文献の表記については、学問分野や学会の発表媒体によって、さまざまな書き方があります。指導教員の指導のもと、自分のテーマ・学問分野にもっとも適切と思われる方式を選んでください。そして、必ず指導教員にチェックをしてもらい、適切な表記になっているかどうか確認を怠らないようにしてください。以下に書き方の一例を示しておきます。

〈例〉

本文中で文献を引用するときは、引用文の後に1のように註番号をつけ、本文のあとに置く「註」のページにはその番号を記して、著者名、文献の題名、出版社、出版年を書き、その後に引用ページを書きます。

また、引用文献が2人の共著の場合は、引用のたびに両著者の姓を書きます。著者が3人以上の場合は、初出の際には全著者の姓を書き、2度目以降は第1著者の姓のみ、田中他や Smith et al., のように表記します。

参考文献についても、著者名、文献の題名、出版社、出版年が必要な書誌情報となります。もし雑誌論文を提示する場合は、著者名、論文の題名、雑誌（紀要）名、号数、出版社（もしくは学会名）、出版年が必要な書誌情報となります。また、論文集の中の論文を提示する場合は、著者名、論文の題名、論文集（文献）名、編者名、出版社、出版年が必要な書誌情報になります。

3 卒業論文を書く意味

さて、先行研究のうえに立って進められる考察が（いきなり後続の研究者によって参照される大論文にはならないまでも）、後輩の卒業論文執筆の見本となるには、さらに、論述が論理的整合性を有し、かつまた既存の研究に何らかの知見（初学者なりの）をもたらすものである、といった体裁・形式の問題を超えたプラスアルファの要素＝内容が求められます。

けれどもそういった問題こそは、それぞれの演習〔ゼミ〕の現場で各指導教員の責任において教授されることがらでしょう。そこでここでは、なぜ卒業論文を書くのかという総論的内容を記して、この葉のまとめとしておきます。

＊

卒業論文は、みなさんがひとつの主題について自分の考えをまとめ、他人の評価を求めるたいへん重要な機会として課されています。論文の作成は4年間の大学生活の集大成であることはもちろんですが、文章をつうじて他者の評価を待つという、社会生活を送るうえでもっとも基本的な活動の最初の本格的な試みとなるのです。

一定の時間のなかで、自分自身の主題を見つけ、資料を集め、分析し、文章化し、繰り返し読んで手を入れ、そして完成するという過程は、各種の講読、実験、演習などによって身につけてきたはずです。卒業論文では、自分を凝縮して文章に盛り込んでゆくこの作業を、今まで以上に集中して、高い密度でおこなうことが求められます。

しかもその主題設定においては一定の独創性を、資料収集においては個性的な視点を、分析においては鋭さを、文章においては読み手を引き込む説得力を求められます。そしてこうした要件こそは、どのようなかたちであれ、あなたが社会に出て、自らの主張を文章をつうじて発する上で求められる要件にほかならないのです。

＊

最後にくりかえします——この葉に記された事柄は、文化芸術専攻教員が最低限必要と合意した標準的な内容ばかりですが、個別の論文の内容がここからの逸脱を要求する場合もあるかもしれませんし、逆に指導教員がすすんで特別の指示をあたえる場合もあるでしょう。

極端な話、ここにシロと書かれてあってもゼミでの討論と教員の指導から得られた結論が、クロであればクロとするぐらいに、じっさいのゼミの内容を重視して、本冊子はあくまでも補足的なものであると了解してください。

MEMO

